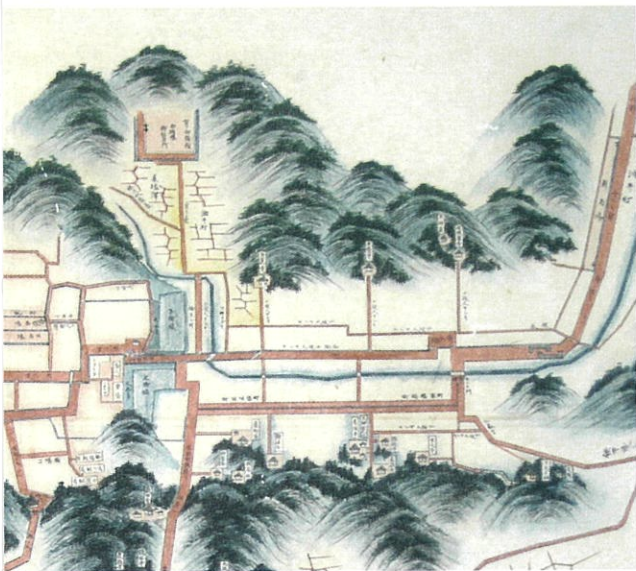




「二本松御城郭全図」(幕末期) 旧藩主・丹羽家所蔵

二本松城主・城代等の変遷

領主	区別	氏名	支配期間
畠山	城主	満泰(満盛) 持重 村国 義氏 義継	応永21年(1414) ～ 天正14年(1586) 7月
	城主	片倉景綱 伊達成実 石田景頼 大柴宗義	天正14年(1586) 7月 ～ 天正18年(1590) 8月
蒲生氏郷	城代	蒲生郷成 町野繁仍 町野幸和	天正18年(1590) 8月 ～ 慶長3年(1598) 3月
上杉景勝	城代	秋山定綱 下條忠親	慶長3年(1598) 3月～ 慶長6年(1601) 8月
蒲生秀行 蒲生忠郷	城代	梅原弥左衛門 本山安政 本池良重 外屋助右衛門 門屋但馬守	慶長6年(1601) 8月 ～ 寛永4年(1627) 1月
〔幕府領〕	在番	酒井右近大夫 太田原晴清	寛永4年(1627) 1月～ 2月
加藤嘉明 加藤明成	城主	松下重綱 松下長綱 加藤明利	寛永4年(1627) 2月 ～ 寛永18年(1641) 3月
		《加藤氏代官支配》	寛永18年3月～寛永20年5月
〔幕府領〕	在番	相馬義胤	寛永20年(1643) 5月～8月
丹羽(にわ)	城主	¹ 光重 ² 長次 ³ 長之 ⁴ 秀延 ⁵ 高寛 ⁶ 高庸 ⁷ 長貴 ⁸ 長祥 ⁹ 長富 ¹⁰ 長国	寛永20年(1643) 8月 ～ 明治1年(1868) 12月



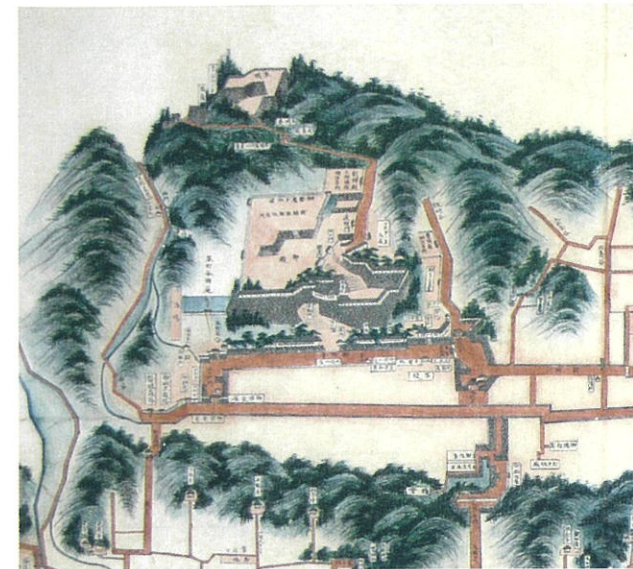
初代二本松藩主・丹羽光重画像 大隣寺所蔵



各時代の石積み様式を
今に遺す「石垣博物館」
二本松城跡

二本松市教育委員会

〒964-8601 福島県二本松市金色403番地1
TEL (0243) 23-1111(代)



二本松城の歴史

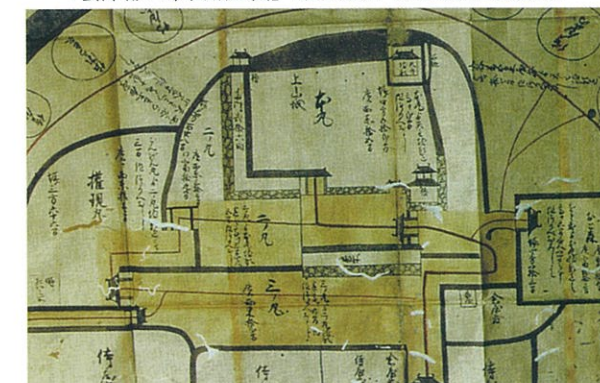
二本松城は、室町時代中期に奥州管領を命じられた畠山満泰が築造し、以後畠山氏歴代の居城として140年余り続きました。その後、天正14年(1586)伊達政宗の執拗な攻撃に遭い、落城しました。

豊臣時代になると、二本松城は会津領主となった蒲生氏郷の重要な支城として、中通り(仙道)警備の任を与えられました。二本松城に石垣が積まれ、近世城郭として機能し始めたのはこのころだと推定されます。

その後、徳川時代初期も会津領として、蒲生氏・加藤氏らの支配下にありました。とくに、加藤氏支配時代には本丸を拡張したことが平成6年の石垣解体調査で確認されました。

二本松藩が誕生した寛永20年(1643)、初代藩主丹羽光重が10万700石で入城し、幕末まで丹羽氏10代の居城として220有余年続きました。戊辰戦争に際し、西軍との徹底抗戦で城内・家中屋敷のすべてを焼失し、慶応4年(1868)7月29日に落城しました。

「会津郡二本松城之図」(慶長初期) 国立国会図書館所蔵



本丸石垣修築・復元の概要

平成3年3月から5ヵ月にわたり実施した発掘調査で、はじめて本丸の形状と規模が判明しました。

すでに崩壊し滅失したと考えられていた石垣の、②面から⑥面までの長さ約80mにわたる石垣が検出されたからです。そして、石垣の特徴的な積み方のひとつである慶長期の「野面(のづら)積」や、元和・寛永期の各様式のほか、江戸後半期の様式が確認できました。

これらの貴重な石垣を後世に残すため、各方面からの検討を重ね、平成5年8月から学術調査と合わせて石垣の全面修築・復元工事に着手し、約5億3千万円を費やし、平成7年6月に完成しました。

《修築・復元工事の特徴》

1. 時代性＝城郭として機能した江戸時代の二本松城の、各時期の石積み様式を活かしました。
2. 伝統技術＝先人が残した知恵と技術をくみとり、石の配置方法や加工方法など江戸時代の技術を採用しました。
3. 地域性＝二本松城の構築技術を調査・検討し、二本松城ならではの特徴を活かしました。
4. 強度＝裏込め石の選択や、軟弱な支持地盤の補強など、できる限りの耐久性を考慮しました。

本丸石垣修築・復元工事の方法

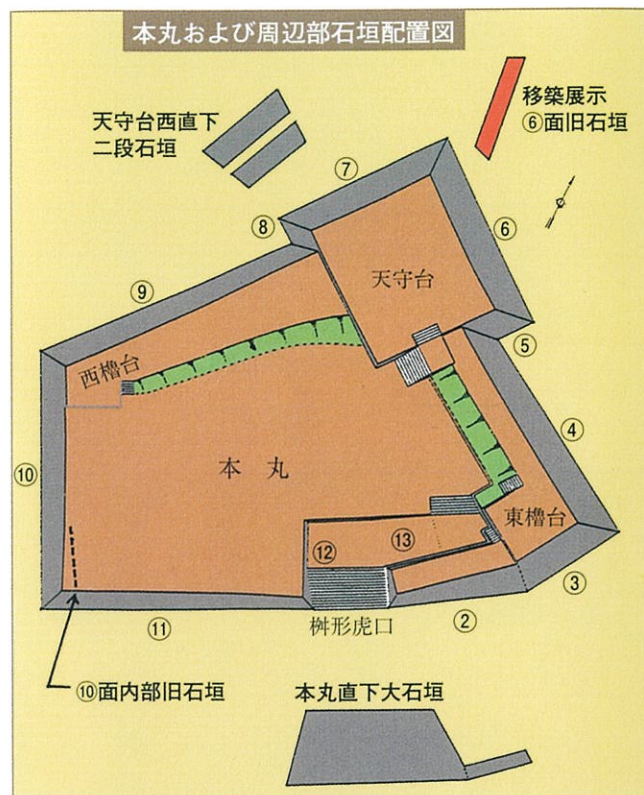
面	主な該当箇所	成立期(下限)	修築・復元方針
②	①②面出角部	江戸後半期	江戸後半様式
③	②③面シノギ角部	寛永期	寛永様式
④	③④面出角部	寛永期	寛永様式
⑤	築石下部	元和期	元和様式
⑥	⑤⑥面出角部	江戸後半期	江戸後半様式
	築石下部	慶長期	慶長様式
⑦	⑥⑦面出角部	江戸後半期	江戸後半様式
	築石部	昭和50年頃	江戸後半様式
⑧ 築石部			
⑨ 築石部			
⑩	⑨⑩面出角部	昭和28年頃	
⑪	⑩⑪面出角部		
⑫	⑪⑫面出角部		
⑬	築石部	昭和期	江戸後半様式

〔修築〕既存していた石垣を、旧来の形状で積み直すこと。

〔復元〕失われていた石垣を、時代性を考察し新補石材で積むこと。

《工事規模》全体面積：2,217.0㎡

(内訳) 修築部：958.5㎡ 復元部：1,258.5㎡



移築展示 ⑥面旧石垣

この石垣は本来、左側⑥面の下部中央で検出された石垣です。築石(つぎいし)には野面石(のづらいし=自然石)と荒割石(あらわりいし)が用いられ、その積み方は慶長期の古式「野面積」と呼ばれる特徴的な石垣です。二本松城に築かれた最も古い石垣のひとつです。

左右端部周辺、及び中央上部は江戸後半期に積み直されましたが、「野面積」石垣は130石ほど残っていました。しかし、《約50%を占める石材が風化により割れ再使用できないこと》《⑥面全体を修築・復元する場合に上部石垣の重量に耐えられないこと》が判りました。

そのため、⑥面の下部石垣は新しい石材で「野面積」の復元を図りました。旧石垣は後世に伝えるため、「野面積」の特徴を最も残している長さ約12m、高さ約2.5mの範囲を、近接した場所に、しかも現状の段差地形を利用し移築展示しました。



⑩面石垣内部の旧石垣

⑩面石垣の内部には、別の石垣が保存されていました。⑩面石垣の解体後、裏土の精査中に長さ約7.6m、最も残っている部分で3段・高さ約1mの石垣が発見されたのです。

築石には野面石(自然石)と荒割石が用いられ、その積み方は本丸直下大石垣や、移築展示されている⑥面旧石垣、天守台西直下二段石垣と同様の古式「野面積」と判りました。

「会津郡二本松城之図」や「正保城絵図」など、現存する絵図を比較・検討したところ

旧石垣＝会津領主・蒲生氏郷が二本松城に初めて築いた慶長期の石垣

⑩面石垣＝のちの会津領主・加藤氏が修築、拡張した寛永初期の石垣

であることが解明できました。

旧石垣は二本松城の歴史を考える上で貴重な遺構であるため、測量や写真及びビデオカメラにより記録し、原状のまま慎重に埋め戻し、保存を図りました。



本丸直下大石垣

本丸直下大石垣

二本松城に築かれた、最も古い石垣のひとつです。築石には野面石と荒割石が用いられ、その積み方は古式の「野面積」と呼ばれる特徴的な石垣です。大小の石材をレンガをねかせるように横積みし、数石しか「横目地(よこめじ)」の通らない、いわゆる「布(ぬの)積み崩し」の積み方です。

勾配は、直線的で緩やかな「ノリ(法)」を主体に構築されています。天端付近は積み直された形跡があり、本来はさらに数段高い石垣であったと考えられます。

二本松城が会津領の支城となった慶長期頃、蒲生氏郷に召抱えられた城郭石積み技術者集団「穴太衆(あのをしゅう)」によって築かれた石垣です。

規模	【幅】	現天端部：約15m	基底部：約21m
	【高さ】	約13m	【ノリ長】約17m
	【勾配】	約7分7厘(約52度)	

天守台西直下二段石垣

この石垣は、以前から一部分が露出していました。平成6年11月、本丸石垣修築・復元工事とあわせ発掘調査を実施したところ、全体の姿が確認できました。

石垣は、斜面上に上・下二段で構築され、上・下段ともに天端左側の一部分が欠落していました。

築石は野面石(自然石)を主体とし、一部荒割石が用いられ、その積み方は古式の「野面積」と呼ばれる特徴的な石垣です。大小の石材をレンガをねかせるように横積みし、数石しか「横目地」の通らない、いわゆる「布積み崩し」の積み方です。

	基底部幅	天端部幅	高さ	ノリ長	勾配(度)
上段石垣	約9.6m	約8.8m	約3.5m	約4.3m	約7分5厘(54度)
下段石垣	約11.3m	約9.9m	約3.9m	約4.5m	約6分2厘(58度)

上段と下段の間は、幅約1.6mの犬走り状のテラスで構成されています。

二本松城における最古の石垣であり、天守台の搦手(からめて=裏側)を意識して築かれたものといえます。



天守台西直下二段石垣